

ハーバーマスのマルクレーゼ批判と コミュニケーション論的転回

飯島祐介

Habermas' Critique of Marcuse and the Communicative Turn

IJIMA Yusuke

Abstract

The purpose of this paper is to show that Jürgen Habermas struggled to rescue Herbert Marcuse's critical theory in the formation process of his *The Theory of Communicative Action*. This major work of Habermas should be understood as a response to the limitations of Marcuse's critical theory as well as those of Max Horkheimer and Theodor W. Adorno. The main findings of this paper are as follows. First, the prototypes of the communicative paradigm can be interpreted as the result of the critique of Marcuse. Second, this critique was an attempt to rescue Marcuse's theory from the critical situations that arose in the era of the student protest movement and the terrorism of the Red Army faction. Thirdly, this attempt stemmed from the fact that the early formation of Habermas' critical theory was based on Marcuse's theory.

1. 問題

ユルゲン・ハーバーマスの主著である『コミュニケーション的行為の理論』の形成過程には、マックス・ホルクハイマーやテオドール・W・アドルノとの対決だけでなく、ヘルベルト・マルクレーゼの批判理論を救出しようとする格闘があったこと、今や見えにくいものとなっている、この格闘を再び明るみに出すこと、これが本論の目的である。

『コミュニケーション的行為の理論』は、批判理論のパラダイムを意識哲学からコミュニケーション理論へと転換する試みとして、そしてこの転換に基づいて初期批判理論のプログラムを再生する試みとして、理解されうる。この理解をあらためてパラフレーズすると、次のようになる。『コミュニケーション的行為の理論』は、理性を意識ではなくコミュニケーションの性能として捉え直そうとする。理性はコミュニケーション的理性として、すなわち強制なき合

意を可能にするコミュニケーションの諸条件として概念化される。さらに、この理性概念を基礎に、これに対応した行為理論上の概念としてコミュニケーション的行為が、社会理論上の概念として生活世界が、それぞれ設定される。ここに、道具的理性や目的合理的行為そしてシステムに還元されない、むしろそれらを相対化する地平が指定され、世界は二元論的に捉え直される。

このようなパラダイム転換を踏まえて、『コミュニケーション的行為の理論』は、初期批判理論のプログラムの再生を試みる。このプログラムは、理性的に組織化された社会の実現を目指していた。しかし、マックス・ホルクハイマーやテオドル・W・アドルノが、『啓蒙の弁証法』で、理性それ自体をとくに道具的理性として批判したことで、隘路にはまり込むことになった。そこで、道具的理性に還元されないコミュニケーション的理性を基礎とすることで、このプログラムの再生を図る、と。

こうした理解は、何よりハーバーマス自身のものである。彼は『コミュニケーション的行為の理論』で、「初期批判理論のプログラムが挫折したのは、あれやこれやの偶然によってではなく、意識哲学のパラダイムの疲弊によるものである」としたうえで、「コミュニケーション理論へのパラダイム転換こそ、当時、道具的理性批判とともに中断されてしまった企図への復帰を可能にするのだということを、明らかにしようと思う」としている (Habermas [1981]1999: I 517-8=1986: 155)。そして、同書の末尾で「批判的社会理論の課題」について論じることになるのである¹⁾。

ここで道具的理性批判の立場から、パラダイム転換で犠牲にされたものが問題とされるのは当然であろう。例えば、マーティン・モリスは、「ハーバーマス理論は批判的社会理論に多くの価値ある洞察や貢献をもたらしたが、アドルノの批判理論の到達点から評価すると、「パラダイム」に関わるような深刻な困難や欠点がある」(Morris 2001: 8)とする。あるいは、入谷秀一は次のように述べる。「アドルノのいう「よき動物」としての人とは、その過剰さに自ら傷つき、さらに他者のそうした傷に共感すら寄せる存在なのだが、動物的、あまりに動物的な、とハーバーマスならいかかもしれない」(入谷 2023: 123)。

こうした犠牲の告発について、その妥当性を個々に問うことは可能かもしれないが、全体として否定することはできないだろう。犠牲にしたものがあることは疑いえない。そうだとすると、次の問いが学説史には提起される。おそらくは少なくない犠牲を払いながら、なぜハーバーマスは初期批判理論のプログラムの再生を試みたのか。さらに、その前提となるコミュニケーション理論へのパラダイム転換——いわゆるコミュニケーション論的転回——を、そもそもなぜ試みたのか。

本論は後者の問いに答えることを試みる。この問いに対しては、もとよりさまざまな答えがありうる。折り重なるさまざまな背景の元でコミュニケーション理論のパラダイムへの転換は遂行されたと考えるのが、妥当であろう。

そうした背景のひとつとして、ヘルベルト・マルクーゼ批判に焦点を合わせることで、上述の問いに対する答えの一つを提示することを試みる。この試みを通して本論は、『コミュニケーション的行為の理論』の形成過程には、ホルクハイマーやアドルノとの対決だけでなく、マル

クーゼを救出しようとする格闘もあったことを明らかにする。ハーバーマスの批判理論は、ホルクハイマーやアドルノだけでなく、マルクーゼの延長線上にも位置づけられなければならないのである。

『コミュニケーション的行為の理論』(1981年)の形成過程は、「史的唯物論の再構成」(1975年)などを経て「労働と相互行為——ヘーゲルの「イェナ精神哲学」への註」(1967年)にさかのぼることができる。この時期は、戦後ドイツ史のうえでは、学生運動の最盛期からドイツ赤軍派(Rote Armee Fraktion: RAF)のテロルが続発する時期にあたる。ハーバーマス個人としては、学生運動を批判し理論研究へと軸足を移していく時期であり、同時に学生運動の後見人であったマルクーゼへの批判的な論及が重ねられる時期でもある。こうした事情を踏まえるなら、『コミュニケーション的行為の理論』の形成過程を、少なくともそのひとつの経路を、マルクーゼ批判に求めることは、その成否が事後的に評価されるのは当然としても、ひとつの試みとしては許容されよう。

以下ではまず、ハーバーマスのマルクーゼ批判をめぐる先行研究を簡潔に振り返り、この批判をマルクーゼ批判理論の修正や展開の試みとして捉える見地を取り出す(第2節)。次に、この見地に立ってマルクーゼ批判を再構成し、この批判の帰結としてコミュニケーション理論のパラダイムへの萌芽が現れていることを明らかにする(第3節・第4節)。続いて、この批判の背景には、学生運動の先鋭化やドイツ赤軍派のテロルの中でマルクーゼ批判理論が陥っていた窮地から、それを救出するという課題があったことを明らかにする(第5節)。さらに、この救出という課題がまさに課題となったのは、ハーバーマスの批判理論がホルクハイマーやアドルノよりもマルクーゼのそれを継承することから出発したという事情があったことを明らかにする(第6節)。最後に、本論が上述の問いにどのように答えたことになるかをあらためて確認したうえで、マルクーゼ批判の逆説的な帰結について指摘する(第7節)。

2. 修正・展開の試みとしての批判

ハーバーマスは、1968年から1980年にかけて、「〈イデオロギー〉としての技術と科学」(1968年)、「反記念論文集への序文」(1968年)、「芸術と革命について」(1973年)、「ヘルベルト・マルクーゼとの対話」(1977)、「心理的テルミドールと反抗的主体性の再生」(1980)を公表し、マルクーゼに対して批判的な論及を重ねる。

そこでのハーバーマスのマルクーゼ批判は、次の二点に集約される。第一に、マルクーゼが自然を対象ではなくコミュニケーションの相手とする新技術と新科学を構想した点に対する批判である。ハーバーマスは、この構想を、非現実的とする。第二に、理性を衝動のうちに自然主義的に基礎づけようとした点に対する批判である。ハーバーマスは、この基礎づけを不十分とする。

ハーバーマスのマルクーゼ批判は、マルクス主義的な立場から批判されてきた。既存の技術と科学の廃棄を主張しない点で保守的であり、修正主義的とされる。ベン・アガーは、「ハーバ

ーマスは修正主義者であり、「生産様式」とその作動原理である技術的合理性が変化できるとは信じず、政治的な上部構造や知的な上部構造だけが変化できると信じる」とする（Agger 1976: 181）。アガーによると、これに対して、「マルクーゼはマルクスのように「土台」と「上部構造」を決して分けない」（Agger 1976: 181）。「だからマルクーゼは、資本主義的な社会関係の全体を変形することを望む」（Agger 1976: 181）。

また、それは現象学的な立場からも批判されてきた。マルクーゼの新技术と新科学の構想を批判するハーバーマスは、そもそも言語の世界開示の契機を軽視しているとされる。サミル・ガンデーシャは、「特殊にはハーバーマスのマルクーゼ批判は、また実際にはハーバーマスのプロジェクト全体は、言語の世界開示の観念を周辺化することを前提とする」（Gandesha 2004: 201）。この「周辺化」の代償は、小さくないとされる。ガンデーシャによると、「どんな理論も世界それ自体が可能になる仕方を描くことができないなら、生活世界の記号的な構造を物象化し、それゆえにその変容の可能性を切り詰めているに違いない」のである（Gandesha 2004: 203）。ここで、マルクーゼの優位性が主張される。「対照的に、マルクーゼの理論の大きなメリットは、妥当性と意味が真の緊張状態の中でどのように存在しているかを明らかにすることにある」（Gandesha 2004: 203）。

さらにそれは、フランクフルト学派第一世代の立場からも批判されてきた。マルクーゼによる理性の自然主義的基礎づけを批判するハーバーマスは、自然をめぐる問題を自身の理論に取り入れることが十分にはできていないとされる。辰巳伸知は、「マルクーゼを含めて、フランクフルト学派第一世代の大きな遺産のうちの一つは、内的自然——コミュニケーション以前の、あるいはコミュニケーションによってとりこぼされる内的自然——の問題だったはずだが、今のところハーバーマスにとっては、この内的自然は、巨大な暗部、理論が手をつけることのできない領域であり続けているようにも思われる」とする（辰巳 1992: 80）。

こうした批判では、両者の立場の断絶に焦点が合わされている。そして、マルクーゼの立場からハーバーマスが批判されている。これに対して、両者の連続にも焦点を合わせる必要のあることが主張されてきた。マルクーゼ批判は、マルクーゼ批判理論の修正や展開の試みとされる。たとえば、アンドリュー・フィーンバーグは、「いずれにしても、ハーバーマスはマルクーゼをたんに捨て去るのではない」とする（Feenberg 1996: 49）。ハーバーマスの「植民地化テーゼ」は、システムが生活世界へと過度に拡張することを問題とする。フィーンバーグは、この「植民地化テーゼ」の由来をマルクーゼの「一次元性」のコンセプトに求める。このコンセプトは、「テクノクラシーテーゼのマルクーゼバージョン」であり、それによると「先進社会には全面的管理へ向かう傾向がある」（Feenberg 1996: 49）。「彼〔ハーバーマス〕は、このアイディアを、思考と行為の技術的モードの過度の拡張という観点から展開した」というのである（Feenberg 1996: 49）。

しかし、フィーンバーグは、ここで逆説的な事態を見出す。『コミュニケーション的行為の理論』の中心的なテーゼである「植民地化」はマルクーゼの技術批判に由来しながら、『コミュニケーション的行為の理論』には「技術」の観念が見られないという事態である。「逆説的なことに、ハーバーマスの「植民地化テーゼ」の萌芽は少なくとも部分的には、マルクーゼの技術批

判から引き出されているように見えながらも、技術それ自体はこの時点でハーバーマスの方程式からは脱落し、二度と再登場しない」(Feenberg 1996: 49)。フィーンバーグは、「私が示そうとするように、ハーバーマス理論は、原理的には技術批判を取り込むことができる」とする(Feenberg 1996: 49)。そして、実際に、「技術」を組み込んだかたちでのハーバーマス理論の修正に乗り出す。

フィーンバーグは、ハーバーマスのマルクーゼ批判がその修正や展開でもあることを指摘している点で正しい。しかし、フィーンバーグの関心は、この修正や展開の内実を明らかにすることに、必ずしも向けられてはいない。彼の関心は理論的であり、修正や展開を通じて形成されたハーバーマス理論を、今度は自らマルクーゼの立場から修正し展開することに振り向けられている。ハーバーマスのマルクーゼ批判における修正や展開の内実を明らかにすることは、学説史が究明すべき課題として残されている。本論では、この課題に応えながら、なぜコミュニケーション理論へのパラダイム転換が試みられたのかという問いに答えることにしたい。

3. マルクーゼ批判理論の修正としての批判

上述したように、ハーバーマスのマルクーゼ批判は、新技術と新科学というマルクーゼの構想を非現実的とする批判と、理性の基礎づけで衝動に訴えることを不十分とする批判との二つに集約される。前者は「〈イデオロギー〉」としての技術と科学」(1968年)で、後者は「ヘルベルト・マルクーゼとの対話」(1977年)で、主に展開される。

順に検討していくことにしよう。マルクーゼは『一次元的人間』で、批判的な思考や行動を喪失した人間を問題とし、その背景に技術や科学の合理性が統治の合理性となり管理が全体化した社会を見出していた。

ハーバーマスは、こうした議論では「科学と技術そのものを革命的に変えないかぎり、解放は考えられえないことになろう」としたうえで、「マルクーゼは、いくつかの箇所で、ユダヤ教神秘主義やプロテスタント神秘主義によってよく知られた「死せる自然の復活 (Resurrektion der gefallenen Natur)」の約束に関連させて、この新科学の理念に従おうと試みる」とする(Habermas [1968]2022: 54=1970: 51)。自然を対象とするのではなくコミュニケーションの相手とする、新しい科学や技術への革命的な転換が構想される。

しかし、ハーバーマスは、科学と技術を革命的に変える可能性に疑義を呈する。ハーバーマスによると、マルクーゼにおいてこの可能性は、統治と融合した科学や技術がひとつの歴史的な投企であり、別様の科学や技術の投企によって歴史的に克服されうることを前提とする。ハーバーマスは、この前提に否定的な眼差しを向ける。科学や技術が投企であるとしても、その投企は、ただ一つの、人類全体の投企でしかありえず、歴史的に克服されようがないからである。「技術は、それをそもそもひとつの投企に由来するとすれば、あきらかに人類全体の〈投企〉に還元しうるのみで、歴史的に追い越されるような〈投企〉には還元できない」のである(Habermas [1968]2022: 55=1970: 53)。

ハーバーマスは、アーノルト・ゲーレンに依拠しながら、技術を人間の有機的体を用いた労働を代行する手段と考える。技術の発展は、人間の有機的体の機能をひとつひとつ客体化し代替する過程であった。技術は、労働の手段であるから、自然をコミュニケーションの相手とするのではなく、あくまで対象とする。こうした技術は、人間の自然的な構造が変わらないかぎり必要とされるものであり、歴史的に克服されようがない。人間には労働が必要であり、技術が必要である。この事情は、自然が復活しても変わらない。「それはそれとして、技術のはたらかしは、それ自体としては放棄できないもので、目をみひらいた自然もやはりそれにとってかわることはできないだろう」(Habermas [1968]2022: 57=1970: 55)。

科学についても、同様のことが主張される。「新技術の理念が維持しがいものであるように、新科学の理念も、われわれの問題とする科学が技術的に意のままにする可能性という立場を義務づけられた現代科学である以上、首尾一貫した理念としては成立しがい」(Habermas [1968]2022: 58=1970: 55)。こうして、ハーバーマスは次のように述べるにいたる。「科学の機能に関しても、科学技術の進歩一般と同様に、「いつそう人間的な」代替物は存在しないのである」(Habermas [1968]2022: 58=1970: 55)。

しかし、新技術や新科学の構想を否定することは、マルクーゼとの断絶を意味しない。現代の技術や科学に、何ら問題はないと考えているわけではない。ハーバーマスは、現代の技術や科学を無罪放免とはしない。マルクーゼとともに、有罪を宣告する。それだけではない。マルクーゼがその宣告の際に依拠する「死せる自然の復活」の約束を、ハーバーマスは必ずしも否定しない。ハーバーマスは、自然とのコミュニケーションが不可能であるとはしない。むしろ可能であるとする。ハーバーマスによると、「自然を技術的に意のままにできる対象として扱うのではなく、可能な相互行為の相手として接することはできる」(Habermas [1968]2022: 57=1970: 54)。「まだ完全ではない相互主体性の水準でも、動物や植物、あるいは石にたいしてすら主体性を期待することができ、コミュニケーションが絶たれた状況で自然をたんに加工するのではなく、自然とコミュニケーションをとることができる」のである(Habermas [1968]2022: 57=1970: 54)。さらに、ハーバーマスにとって「死せる自然の復活」は可能であるだけでなく、魅力的でもありえる。ハーバーマスは、独自の構想を披露することも厭わない。

そして、依然として束縛されたままの自然の主体性がときはなたれるには、そのまえにまず人間相互のコミュニケーションが支配から自由にならねばならない、という考えには、ごくひかえ目にいっても、独特の魅力がある。人間が強制なしにコミュニケーションをとり、各人が他人のうちに自己を認識できるようになるときはじめて、おそらくは人類が自然を他の主体として——といっても、理想主義の望むように自然を人間の他者としてではなく、自己を自然という主体の他者として——認識できるのである。(Habermas [1968]2022: 57=1970: 54)

マルクーゼが技術や科学を問題としようとしたこと、そして「死せる自然の復活」に向けてその問題状況を突破しようとしたこと、こうしたことは、ハーバーマスにとっても間違っ

いなかった。ただ、その際、技術と科学を廃棄可能であると誤認し、新技術や新科学を構想したことは誤っていた。

ハーバーマスは、マルクーゼの基本的な正しさを認めるからこそ、誤りを修正しようとする。技術や科学が廃棄しえないのであれば、それらの機能する範囲を適切に限定することが求められる。この限定を構想するかぎりでは、技術と科学の外側が想定される。この外部を、「記号に媒介された相互行為」に求める。「自然を対象としてではなく相手として構想するという、現存の技術に対するオルターナティヴは、オルターナティヴな行為構造に、つまり目的合理的行為とは区別される記号に媒介された相互行為に関係している」(Habermas [1968]2022: 57=1970: 55)。ひるがえって問題は、この外側を侵食することとして捉え直される。「マルクーゼが技術的理性の政治的内容という表現をかぶせるだけに終わっている障害は、概念的に正確に言えば、科学と技術の合理的な形式が、つまり目的合理的行為のシステムのうちに具体化された合理性が、生活形式へと、生活世界の「歴史的全体」へと、拡張するというところにある」(Habermas [1968]2022: 59-60=1970: 57)。ここには、生活世界とシステムの二元論の萌芽的形態を確認することができる。

新技術や新科学を構想するマルクーゼに対する批判は、マルクーゼの否定ではなかった。この批判は、マルクーゼの基本的な正しさを認めることを前提としており、またそうであるがゆえにその誤りの修正へと向かっていた²。そして、この批判には、生活世界とシステムの二元論というコミュニケーション理論のパラダイムの中核的構造へとつながる道が開かれていた。こうしてみると、コミュニケーション理論へのパラダイム転換は、マルクーゼ批判の帰結として現れる。

4. マルクーゼ批判理論の展開としての批判

次に、理性を衝動のうちに自然主義的に基礎づけることを不十分とする批判を検討しよう。ハーバーマスは、「ヘルベルト・マルクーゼとの対話」で、『エロスと文明』の次の部分を引用し、マルクーゼが「教育独裁」に訴えていることを取り上げる。

プラントからルソーまで、唯一の正直な解答は教育独裁というアイディアである。このアイディアは、本物の善について知識を獲得したと考えられる者によって実行される。
(Marcuse [1956]1966: 186=1958: 204)

ハーバーマスは、マルクーゼが「教育独裁」に訴える理由について、理性を自然主義的に基礎づけようと試みていることにあるのではないかと指摘する。「そして、あなたが教育独裁を引き合いに出すのは、理性を自然主義的に基礎づけようとするからではないかと疑っています」(Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58)。理性が衝動に、とくにエロスに他ならないなら、理性は誰もが本来的には備えているものとなる。いち早く理性的となった者がいまだそう

でない者に、理性が命じるものを教示し強制したとしても、それは強制ではないことになる。強制される内容は、強制される者が本来的には自ら命じるものだからである。たしかにこうして、「教育独裁」の余地が生じる。

マルクーゼは、「教育独裁」については「あなたが引用した箇所はわざと挑発的に定式化されている」(Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58) として受け流す。実は、マルクーゼは、上記の引用の直後で、「この答えはそれ以来、時代遅れになってしまった」としていた (Marcuse [1956]1966: 186=1958: 204)。とはいえ、ハーバーマスの批判は、「教育独裁」それ自体というより、それを帰結する可能性がある、理性の自然主義的な基礎づけへと向けられている。マルクーゼは、このことを真摯に受け止める。「わざと挑発的に定式化されている」と受け流した直後に、「しかしそれが主要問題ではない」とする (Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58)。そして、理性の自然主義的な基礎づけに関心を向け直し、端的にそれを認める。「理性の自然主義的な基礎づけという主要問題については、わたしはたしかにあえて次のように主張したい。そのとおりだ。それはわたしには必然的にしか思われない」(Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58)。さらに、少し後の箇所で、直截に次のように主張する。

理性あるいは理性的なるものは、実際に衝動のうちに、つまり破壊を食い止めるエロスのなエネルギーの圧力のうちに潜んでいる。まさにこの圧力を、私は理性として定義したい。

(Habermas [1978]1987: 288=[1986]1999: 60)

マルクーゼによると、私たちはエロスによって「よりよき生活」が何かについて普遍的に一致しうる。すなわち、私たちは二つの価値判断に達する。「生きていないよりも生きているほうがよい」という判断と、「よき生活をおくるほうが悪しき生活をおくるよりもよい」という判断である (Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58)。さらに、この「還元不可能な価値判断」から、私たちは「よりよき社会におけるよりよき生活の機会を実証可能なかたちで促進する抑圧は理性的」であるとの判断に達する (Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 58)。

ハーバーマスはここでも、マルクーゼの議論を全面的に否定するわけではない。まず、理性を基礎づけようとする試みを否定しない。ハーバーマス自身も、コミュニケーション理論的にはあるとしても、理性を基礎づけようとする立場にある。さらに、ハーバーマスは、自然主義的に基礎づけようと試みることすらも、厳密に言えば否定していない。自然主義的に基礎づける試みが限界に突き当たること、その限界を踏まえると自然主義的ではない基礎づけが必要になることが説かれる。理性の基礎づけにあたって、衝動に訴えることがファイナルアンサーとはなりえないことを問題とするのである。

まずもって、ハーバーマスは衝動にエロスが存在することを認める。「当然のことながらそこには、広く受け入れられた何か普遍的なものもあるわけで、私たちはそれをエロスと名づけることができます」(Habermas [1978]1987: 289=[1986]1999: 60)。このエロスに基づいて、たしかに私たちは「よりよき生活」とは何かについて知ることができる。マルクーゼが考えるように、「よりよき生活」について、普遍的な一致は可能である。しかし、話はここで終わらない。

その都度の具体的な状況で「よりよき生活」がどのように具体化されうるかについては、解釈がわかる。「いや、問題はまさに、すべての人々は何がよりよき生活であるかをかなり正確に知っていますが、しかしその解釈においては即座には一致しないということです」(Habermas [1978]1987: 287=[1986]1999: 59)。

この不一致がある以上、それを暴力の応酬へと転落せしめない普遍的なものが理性ということになる。ハーバーマスは、それを、私たちが言語を用いるかぎりで前提とせざるを得ない「強制なき意志形成の諸条件」に求める。理性は、衝動ではなく言語のうちにある。「しかしそうすると、理性とは衝動のうちには存しないものであり、派手な言い方をするならば、言語のうちに存しているものです。この場合、理性は強制なき意志形成の諸条件のうちに存しています」(Habermas [1978]1987: 288=[1986]1999: 60)。

理性を自然主義的に基礎づけようとするマルクーゼに対する批判は、その全面的な否定ではなかった。この批判は、理性の基礎づけという企図の正しさを認めている。さらに、自然主義的に衝動から出発することもおそらくは認めているし、そこに普遍的な一致が形成されることはかえって認めている。批判は、マルクーゼの試みの基本的な正しさを前提とする。そうであるからこそ、その試みの完遂へと向かっていった。そして、この完遂において、コミュニケーション的理性というコミュニケーション理論のパラダイムの中核的要素へとつながる道が開かれていた。こうしてみると、コミュニケーション理論へのパラダイム転換は、マルクーゼ批判の帰結として現れる。しかし、そもそもこのようなマルクーゼ批判が課題となったのは、なぜだろうか。

5. マルクーゼ批判理論の救出

マルクーゼの新技术や新科学の構想への批判が展開された「(イデオロギー)」としての技術と科学」には、「ヘルベルト・マルクーゼの 70 歳の誕生日のために 1968 年 7 月 19 日」と添え書きされている。この論考は、「少しでも簡略された」バージョンが 1968 年 7 月と 8 月にメルクーア誌に掲載された後、同年にゾーアカンブ社からこの論考のタイトルを書名とする論集に収録されるかたちで刊行された。この時期のドイツ連邦共和国は、学生運動の最盛期にあり、その終焉へと向かう時期にあった。

学生運動に対して、ハーバーマスは当初は肯定的であったが、すでに批判的な姿勢に転じていた。ハーバーマスは、1967 年 6 月 9 日にハノーファーで開催された集会で、学生運動のリーダーであったルディ・ドゥチュケに対して「左翼ファシズム」との言葉をぶつけていた。1968 年 6 月 5 日には日刊紙フランクfurter・ルントシャウに「えせ革命とその子どもたち」を寄稿し、批判の手を緩めていなかった。ハーバーマスは当初、学生運動を大学の民主化に貢献するものとして期待していた。大学の民主化は、『公共性の構造転換』で提唱されていた組織内の公共性への私人の参加の試金石となるものであった。しかし、ハーバーマスは、次第に先鋭化し全面的な否定の傾向を強め時には暴力の行使を示唆するようになった学生運動に対して、厳し

い姿勢を取るようになっていた。

しかし、これに対して、マルクーゼは、学生運動の後見人であり続けた。たとえば、1969年1月30日に社会研究所を占拠した学生の排除をフォン・フリーデベルクとともに警察に要請していたアドルノに対して、4月5日付書簡で「警察か左翼の学生かを選ぶのであれば、私は学生を選ぶ」と決然と書き送っている（Marcuse [1969]1998: 601）。さらに、この書簡には、「この新鮮な空気は、「左翼ファシズム」（形容矛盾！）の空気なんかではない」とも記されている（Marcuse [1969]1998: 602）。

マルクーゼは、学生運動によってその先鋭化した姿勢を正当化するために利用されかねない、危うい状況に置かれていた。ハーバーマスにとって、この危険は現実的なものであった。ハーバーマスは、1968年のマルクーゼの誕生日（7月20日）——「〈イデオロギー〉」としての技術と科学」に記された日付の一日後——に、フランクフルター・ルントシャウに「若者の反乱の哲学者」を寄稿している。ここで、ハーバーマスは、「しかし、当然のことながら、少なくとも数の若い革命家たちが、存在するものを無限定に否定することの正当化として彼〔マルクーゼ〕の書物を利用することは、まったく正しいわけではない」と批判している（Habermas[1968]1987: 257= [1986]1999: 15）。

新技術や新科学をめぐる議論は、そのラディカリズムにおいて、こうした危うい状況を悪化させることになりかねない。ハーバーマスは、マルクーゼについて「実存主義へのある種の回帰があり、この回帰は現代的形態における科学と技術を歴史的に追い越されうる「投企」へと格下げする」としたうえで、「だからヘルベルト・マルクーゼは、若者の反乱の哲学者になった、それは当然のことだ」とする（Habermas[1968]1987: 257= [1986]1999: 15）。新技術や新科学をめぐる議論は、そのラディカリズムを緩和させる必要があった。マルクーゼ批判は、まさにこの緩和の試みであった。マルクーゼ批判が課題となったのは、マルクーゼが学生運動の先鋭化した姿勢の正当化のために利用されかねない危うい状況に置かれていたからであった。

他方、「ヘルベルト・マルクーゼとの対話」は、1977年7月、マルクーゼの誕生日の前に、行われている。ドイツの秋（Deutscher Herbst）³が始まる直前であった。「対話」の直後となる7月30日には、ドレスナー銀行頭取ユルゲン・ポントがドイツ赤軍派メンバーによって射殺された。そして、ドイツ経営者連盟（BDA）会長ハンス＝マルティン・シュライヤーが誘拐されドイツの秋が始まったのは、9月5日であった。予兆はすでにあった。1977年4月7日には、連邦検事総長ジークフリート・ブーバックがカールスルーエで暗殺されていた。1975年には、政治家ペーター・ロレンツの誘拐事件や、ストックホルムの西ドイツ大使館占拠事件が発生していた。1972年にドイツ赤軍派の中心的メンバーであったアンドレアス・パーダーやウルリケ・マインホフらが逮捕されていたが、それはむしろテロリズムの始まりを告げるものであった。

この時期、ハーバーマスは、マックス・プランク研究所（科学的・技術的世界における生活条件研究）の所長をカール・F・フォン・ヴァイツゼッカーとともに務めていた。ハーバーマスは1971年に、ベルリン自由大学とともにドイツにおける学生運動の中心地であったフランクフルト大学を離れ、ミュンヘン近郊のシュタルンベルクにある研究所に籍を移していた。彼は、

風光明媚で知られるシュタルンベルク湖畔の地で、理論研究へと軸足を移していた。

これに対して、マルクーゼは、実践の世界からなおそう遠くはないところにいた。たとえば、「対話」の直前の6月だけを見ても、カリフォルニア大学サンディエゴ校で南アフリカのアパルトヘイト政策に反対する講演を、またバークレー校で「先進資本主義の民主的全体主義への移行」をテーマとする講演を、それぞれ行っていたことが確認できる (Kraushaar 1998: 561)。

マルクーゼは、その理論的内容からすれば不当であるとしても、暴力やテロリズムへの責を問われかねない危うい状況に置かれていた。この状況は、ハーバーマスも十分に意識していたと考えられる。たとえば、マルクーゼの『反革命と反乱』(1973年)についての書評で、「しかし、こうした戦術的な前置きは、この本の主題を捉えるものではない」と直後に断ることになりながら冒頭で強調するのは、「戦闘的な人々に対して自制をこのように訴えることが新しい論調である」ということであつた (Habermas [1973]1987: 260=[1986]1999: 19)。この「戦術的な前置き」は、マルクーゼが置かれた危うい状況を意識し彼を弁護しようとしたものとして読むことは可能であろう。

こうした危うい状況では、理性を衝動へと自然主義的に基礎づけようとすることは非合理的なものへの訴えとして取り違えられ、状況をいよいよ悪化させることになりかねない。この取り違えの余地をなくすためには、自然主義的な基礎づけをさらに前進させ、コミュニケーション論的な基礎づけへといたる必要があつた。マルクーゼ批判は、まさにこの前進の試みであつた⁴。マルクーゼ批判が課題となつたのは、彼がドイツ赤軍派のテロルの中で暴力やテロリズムへの責を問われかねない危うい状況に置かれていたからである。

マルクーゼ批判は、学生運動の先鋭化そしてドイツ赤軍派のテロルの中で危うい状況に置かれていたマルクーゼ批判理論を救出する試みであつた。しかし、マルクーゼ批判理論が危うい状況に置かれたとして、なぜその救出が課題となるのか。ハーバーマスは、なぜ放っておくことはできなかったのか。ドイツの秋から学生運動をこえて二十年あまり時をさかのぼることにしよう。

6. マルクーゼ批判理論の継承からの出発

1956年5月6日のフロイト生誕百年に、フランクフルト大学哲学部とハイデルベルク大学医学部は、精神分析の研究者を海外から招いた。招待された11名は、1956年夏セメスターに講義、演習、講演を行った。エリック・H・エリクソンをはじめとする、この11名に、マルクーゼも含まれていた。27歳のハーバーマスは、このイベントについて総括する記事を日刊紙フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥングに寄稿している。時の大統領テオドル・ホイスもセレモニーに臨席したイベントに対するハーバーマスの評価は、必ずしも高くない。彼は評論の冒頭で、「すべてのゲストが己の名に恥じぬ輝きを放つ講演を行ったわけではない」とする。しかし同時に、フランツ・アレクサンダーとハンス・ツリガーとともに、マルクーゼの名を挙げながら、この3名の貢献によってその終了は「引き締まったときには輝きに満ちたもの

となった」とする(Habermas 1956: 10)。その中でも、マルクーゼに対する評価は、すこぶる高い。ハーバーマスは、評論を次のように締めくくる。

彼〔マルクーゼ〕は、頑迷固陋のきわみにあっても、何はともあれ少なくともある気づきをもたらした。所与のものをその「概念」において、つまり歴史的な展開の客観的可能性において吟味することなく、思考のなかで強化するという月並みな諦念を、私たちが皆、どれだけ無意識的に分けもっているかということへの気づきをもたらしたのである。そして、このことは、今回の連続講演の唯一の成果であろう。この成果は、フロイトを追想するに相応しいであろう。(Habermas 1956: 10)

シュテファン・ミュラー＝ドームの言を借りると、「要するに、ハーバーマスは、ただただマルクーゼの虜になったのだ」(Müller-Doohm 2014: 113)。ハーバーマスは、マルクーゼの「18世紀の無邪気さをともなったユートピア的なエネルギーを私たちのような時代に再び解放する勇氣」に惹きつけられた(Habermas 1956: 10)。現実をただ肯定するのではなく、逆にただ否定するのでもなく、否定的な現実の中にもそれを超え出る可能性を見出そうとするマルクーゼに魅了された⁵。

1956年はアデナウアー時代の中盤の時期にあたり、復古的で保守的な空気が連邦共和国を覆っていた。フランクフルト大学の社会研究所すらも、その例外ではなかった。ホルクハイマーによって若手の所員に悪影響を及ぼすと考えられた、初期批判理論の『社会研究誌』は、若手の所員から慎重に遠ざけられていた。よく知られたハーバーマスの証言によると、「完全な揃いは研究所の地下室に置かれた釘打ちされた木箱の中に厳重に保管され、私たちの手の届かないようになっていた」のである(Habermas [1980]1987b: 415=[1986]1999: 237)。こうした状況の中に、アメリカからマルクーゼは突然に颯爽と登場した。「私はたった二カ月前に研究所での仕事を始めたばかりだったが、研究所からは失われていた過去が、このとき予期しないかたちで、弁証的な修辭なしに、生き活きとした今ここにある精神として立ち向かってきた」のである(Habermas 2011: 62)。マルクーゼの発するユートピア的なエネルギーは、たちまちハーバーマスを捉えた⁶。

ハーバーマスは、1954年にボン大学で「絶対者と歴史——シェリングの思惟における分裂について」で博士号を取得後、フリージャーナリストとして活動していた。フロイト生誕百年のイベントがあった1956年に社会研究所の所員となり、アドルノの助手となっていた。マルクーゼとの出会いは、『公共性の構造転換』(1962年)や『理論と実践』(1963年)を準備した時期の始まりの地点にあった。

この二つの著作によって1960年代初頭に姿を現すハーバーマスの批判理論は、ホルクハイマーはおろかアドルノよりもマルクーゼの精神を引き継ぐものであった。この時期のハーバーマスの批判理論は、社会の自己組織化の観念を、すなわち社会的にあるいは歴史的に形成される大文字の主体が社会や歴史を形成するという観念を多分に含んでいた。たとえば、『理論と実践』に所収された「社会学の批判的課題と保守的課題」では、「このように批判的な社会学は、

まさに社会的行動の一般化された主体というフィクションとして前もって投企された観点から、思考しなければならない」と説かれる（Habermas 1963b: 228=1999: 345）。あるいは、同じく『理論と実践』に所収された「哲学と科学の間——批判としてのマルクス主義」では、「歴史哲学は、さまざまな歴史的主体を歴史の可能的主体として仮構し、客観的には多義的な発展傾向が意志と意識をともなった政治的行動者によって捉えられ彼ら自身のために決定されるようにする」とされる（Habermas 1963a: 214=1999: 320-1）。『公共性の構造転換』における「政治的に機能する公共性」は、「社会的行動の一般化された主体」や「歴史的主体」の中心部分を具現するものに他ならなかった。

社会の自己組織化の観念は、「フィクションとして (fiktiv)」あるいは「仮構する (fingieren)」という慎重な言い回しを含んではいるが、むしろそうであるからこそ、否定的な現実の中にもそれを超え出る可能性を見出そうとするものであった。この点において、1960年代初頭に姿を現すハーバーマスの批判理論は、ホルクハイマーやアドルノよりマルクーゼを継承するものであった。

このことは、ハーバーマス自身も証言している。彼は 1978 年 7 月 10 日付のマルクーゼ宛の手紙で、次のように回想する。

あなたがフランクフルトに来て一年後に、今度はあなたと話をし知り合う機会に恵まれました。当時、私はフランクフルトに来てそれほど経っていませんでした。私はホルクハイマーに懐疑的でしたが、アドルノのことは尊敬していました。しかし、二つのミッシング・リンクがアドルノの弁証的な努力にたんに知的にということではなく衷心から加わることを躊躇させました。現代の哲学（フッサール、ハイデガー、サルトル等々）をフランクフルト学派の仕事に結びつけるリンクと、フランクフルトの理論から政治的实践へと、つまり核兵器や軍あるいはアルジェリアでの戦争等々に反対する私たちのデモへとつながるリンクです。そのとき、私はあなたを読みました——またあなたに会いました——、そして両方を見つけたのです。（Habermas [1978]2013: 18-9）

また、ハーバーマスは後年、批判理論におけるマルクーゼの系譜の存在を繰り返し強調する。批判理論の綱領的論文としては、ホルクハイマーの「伝統的理論と批判理論」が一般的には知られている。これに対して、ハーバーマスは、マルクーゼの「哲学と批判理論」をそれと対をなすものとする（Habermas [1980]1987a: 323=[1986]1999: 110）。批判理論の出発点にホルクハイマーだけでなくマルクーゼも居合わせたという見解は、「ホルクハイマーは、ヘルベルト・マルクーゼとともに批判的な社会理論への端緒を練り上げる」といった表現にもさりげなく現れる（Habermas [1980]1987b: 412=[1986]1999: 233）。さらに、次のようにも言われる。「この雑誌〔『社会研究誌』〕が存在するのを止めて、雑誌とともにこの理論の古典的な形態が崩壊したこの地点から、二つの線が 60 年代後半へと延びている。アドルノとマルクーゼは『啓蒙の弁証法』から、相対立する帰結を引き出した。マルクーゼが、歴史的に光沢を失った理性の要求を衝動理論的に文化から遠く離れたところへと移すのに対して、アドルノは自己自身を否定

する哲学の孤独な黙想に彼の空しい希望を寄せる」(Habermas [1980]1987b: 425=[1986]1999: 250)。こうしたマルクーゼの系譜の強調は、自身の批判理論の出自を、つまりホルクハイマーはおろかアドルノよりもむしろマルクーゼを継承することから出発したことを裏書きしている。

1950年代から60年代にかけてのハーバーマスの理論形成については、なお十分な研究は蓄積されておらず、その全貌は明らかではない。しかし、ハーバーマスの批判理論がマルクーゼを継承することで形成された部分が小さくないことは明らかであろう。そうだとすると、マルクーゼ批判理論の危機は、ハーバーマスにとって自らの批判理論の基礎の浸食であり危機であった。そのかぎりではハーバーマスは、危うい状況に置かれたマルクーゼ批判理論を放っておくことはできない。ハーバーマスには、マルクーゼを救出することが、そのうえでその継承をやり直すことが必要だったのである。

7. 結論

本論の問いは、なぜコミュニケーション理論へのパラダイム転換が遂行されたのかにあった。今やこの問いに対するありうべき答えのひとつを、次のように提示することができる。マルクーゼの批判理論を継承することで自身の批判理論を形成したハーバーマスにとって無視しえない課題、すなわち学生運動の先鋭化とドイツ赤軍派のテロルの中で浮上した、マルクーゼ批判理論の救出という課題に応答するためであった、と。この課題に応答するためには、マルクーゼ批判が必要となったが、この批判はコミュニケーション理論のパラダイムへの萌芽を作り出したのであった。『コミュニケーション的行為の理論』の形成過程には、もとよりさまざまな背景が折り重なっている。マルクーゼを救出しようとする格闘も、そのひとつであった。しかし、そのかぎりでは、ハーバーマスの批判理論は、ホルクハイマーやアドルノだけでなく、マルクーゼの延長線上に位置づけられなければならない。

しかし、マルクーゼを救出しようとする格闘は、逆説的にもマルクーゼとの懸隔をもたらした。社会の自己組織化の観念とは距離がとられるようになる。『コミュニケーション的行為の理論』で問題となるのは、システムへの「抵抗 (Widerstand)」であり、システムを含めた社会全体の組織化ではありえない。「システムの世界と生活世界の間を走っている戦線で、生活世界がはじめて頑固で見込みのある抵抗をするのは、生活世界の記号的な再生産の機能に触れられたときであることは明らかである」(Habermas [1981]1999: II 516=1987: 353)。システムと生活世界の分化を解消しようすることは、近代の否定として退けられる。社会の自己組織化には、その組織化が直接的には及ばない領域がシステムとして残されることになる。ベルリンの壁が崩壊して三年後、1992年に出版された『事実性と妥当性』では、より端的に次のように記される。「市民社会から発生する民主主義的運動には、とくに社会革命というマルクス主義的観念の根底にあった、自分自身を全体として組織化する社会というあの野望は断念されることになる」(Habermas [1992]1994: 450=2003: 103)。

「死せる自然の復活」の約束も、いよいよ後景に退くことになる。『コミュニケーション的

『行為の理論』では、「近代の自己理解に反映されるコミュニケーション的合理性こそ、自立したシステムに固有の力学による生活世界の隷属に対する抵抗に内的な論理を与える」とし、「こうした論理を与えるのは、反抗する自然の無力な憤激だけではない」とする (Habermas [1981]1999: 491=1987: 329)。1985 年に刊行された『近代の哲学的ディスクール』では、なおユダヤ神秘主義からシェリングにいたる流れは挙げられているが、その焦点はもはや「死せる自然の復活」ではなく「転倒した理性 (verkehrte Vernunft)」に置かれている。「ヤーコブ・ベームとイサク・ルリアに続いて、シェリングが、誤謬、犯罪、ごまかしは理性の欠如ではなく、転倒した理性の現象形態であると主張したのは当然であった」としたうえで、コミュニケーション的理性の思想的モチーフを「転倒した理性」の観念に求めている (Habermas [1985]1988: 377=1999: 562-3) ⁷。

「ヘルベルト・マルクーゼとの対話」から二年後、1979 年にシュタルンベルクにハーバーマスを訪問しようとしたマルクーゼは、脳卒中で倒れ帰らぬ人となる。翌 1980 年 3 月 15 日にカリフォルニア大学サンディエゴ校哲学部で追悼集会が開催された。この追悼集会での招待講演を活字化した「心理的テルミドールと反抗的主体性の再生」を、ハーバーマスは次のように締めくくる。

昨年夏に再会したとき、ヘルベルト・マルクーゼはフランクフルトの病院の集中治療室で、ベッドの両側から器具にかこまれて横たわっていた。誰も知らなかったが、終わりの始まりだった。私たちの本当に最後の哲学的な出会いとなった、この機会に、ヘルベルト・マルクーゼは、次のように私に言って、二年前の私たちの論争を続けた。「ほらね、わたしたちの最も基本的な価値判断が何にもとづいているか、私には今よくわかるよ。同情に、他者の苦しみに対する私たちの感受性に、もとづいているのだよ。」 (Habermas [1980]1987a: 355=[1986]1999: 127-8)

ここには、マルクーゼへの限らない近さと今や埋めがたいものとなった懸隔 ⁸ とが、同時に表出されているように思われる。それは、アデナウアー政権下の連邦共和国での 1956 年の出会いに始まり学生運動とドイツの秋の激動をこえて辿り着いた、ハーバーマスのマルクーゼ経験の終着点であった。

追悼集会から半年後、ハーバーマスはテオドル・W・アドルノ賞を受賞する。翌年にはマックス・プランク研究所所長を辞職し、『コミュニケーション的行為の理論』を刊行する。そして 1983 年、古巣のフランクフルト大学に戻ったハーバーマスは、教授活動を「近代性の理論」と銘打たれた講義で開始する (Müller-Doohm 2014: 688)。ハーバーマスの批判理論に残されたマルクーゼの痕跡は、次第に見えにくいものとなっていた。本論は、この痕跡を辿り直す、一つの試みであった。

*本研究は科学研究費基盤研究 (C)「中期 Habermas の社会学理論におけるデモクラシー思想の解明」の研究結果の一部である。

註

- ¹ こうしたハーバーマスの自己理解と同様の理解を、ヘルベルト・シュネーデルバッハは次のように述べる。「ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』は、批判理論の可能性と課題を新しく規定するものとして理解されうる。批判理論の批判は、はっきりとそれとわかるかたちで展開されているが、たんに批判理論を遠ざけるものとして解されるべきではない。むしろ、「道具的理性批判」(ホルクハイマー)を機能主義的理性批判として再演するために、そのスペースを確保するものとして解されるべきである。このことは、簡潔に述べるならば、次の二つのことに依拠する。すなわち、少なくともルカーチ以来、物象化論全体が囚われていたとされる意識哲学のパラダイムの限界を指摘すること、またホルクハイマーとアドルノは道具的理性の批判で常にすでに別の理性概念に訴えてはいたが、その理性概念を基礎づけるために必要となる概念的手段を手にしていなかったと主張することである」(Schnädelbach [1986]2002: 30)。
- ² この弁証法的な批判は、それ自体、批判理論をその批判のエートスにおいて継承する。ハーバーマスが批判理論を継承し独自の理論を構築しようとする過程で、言わばそれに先行してメタ的なレベルで、批判理論の継承が行われていると言えよう。このもう一段深い層における批判理論の継承については、別途、検討が必要となる。この継承について指摘していただいた匿名の査読者に感謝を申し上げたい。
- ³ ドイツの秋は、ドイツ赤軍派によるテロルが頂点に達した 1977 年 9 月から 10 月にかけての期間やそこで醸成された特有の政治状況を指す。9 月 5 日にドイツ赤軍はドイツ経営者連盟会長ハンス＝マルティン・シュライヤーを誘拐し、獄中メンバーの釈放を要求した。政府が要求に応じなかったところ、10 月 13 日にドイツ赤軍派と連携したパレスチナ解放人民戦線によって、フランクフルト行きのルフトハンザ機がスペインのパルマ・デ・マヨルカ空港を離陸直後にハイジャックされた。ハイジャックは、10 月 18 日、連邦共和国の特殊部隊がソマリアのモガディシュ国際空港でルフトハンザ機に突入し、終結した。間もなく、獄中にあったドイツ赤軍のアンドレアス・バーダー、グドルン・エンズリン、ヤン＝カール・ラスペが自殺し、10 月 19 日夜に誘拐されていたシュライヤーの遺体が発見された。
- ⁴ この言わば説得は、結果として不調に終わった。それでも、ハーバーマスは、マルクーゼが暴力やテロリズムとは無縁であることを、哲学的立場からそうであることを、1980 年には、次のように述べている。「けれども、社会主義の基礎となる「衝動」を探し求めることには、もうひとつの重要な契機がある。少なくとも、この努力は、正真正銘の哲学的な意図からなされたものであった。マルクーゼは、実存主義に逆戻りすることを望まなかった。つまり、生き生きとした自由への欲求にたんに訴えることや解放のパトスをたんに呼び起こすことを望まなかった。行為を理性のうえに基礎づけるべく理論的説明を与えることを義務と感じていた」(Habermas [1980]1987a: 332-3=[1986]1999: 124)。ただし、1998 年になると、「暴力の使用に関する問いかけへの彼の両義的な発言」という記述も見られる (Habermas 1998: 233)。
- ⁵ このことはハーバーマスがマルクーゼを全面的に受け容れたことを含意しない。ローマン・ヨスは、「マルクーゼのユートピア的な進歩概念に驚嘆していたのは明らかであったが、同時に報告[フラン

クフルター・アルグマイネ・ツァイトゥングへ寄稿したイベントの総括記事]には若干の慎重さも確認されうる」として、「それは例えばマルクーゼとフランツ・アレクサンダーを試すように対置することから読み取られうる」としている (Yos 2019: 271)。ハーバーマスは、後述するように、「社会的行動の一般化された主体」や「歴史的主体」について論じるようになってからも、それらをさしあたりは「フィクション (Fiktion)」にとどまるものとしており、たしかにマルクーゼよりも慎重である。ハーバーマスの初期の批判理論とマルクーゼのそれとの異同の解明については、今後の課題とした

- 6 ハーバーマスがマルクーゼに魅了された理由を、当時の連邦共和国を覆っていた保守的な空気のみを求めることはできない。博士論文「絶対者と歴史——シェリングの思惟における分裂について」で形成され、ジャーナリズム活動を通して発展した、彼の思想がマルクーゼによる触発を準備したと考えられる。この点については、別稿を期したい。
- 7 ただし「転倒した理性」も、シェリング論に由来する思想的モチーフであり、ハーバーマスの理論形成の初期から存在する。ヨーゼフ・クーラツは、『コミュニケーション的行為の理論』にいたるハーバーマス理論の展開を「転倒」のモチーフのもとで一貫して再構成することを試みている (Keulartz [1992]1995)
- 8 ハーバーマスは、マルクーゼ生誕百年に際して、日刊紙ノイエ・ツューリッヒャー・ツァイトゥングに「哲学と政治の異なったリズム——ヘルベルト・マルクーゼの生誕百年に寄せて」を寄稿しているが、この懸隔を二十年あまりの時を隔てて再確認することになっている。ハーバーマスは、マルクーゼについて、「哲学的な学説の重要性は、政治的アンガージュマンの価値低下の渦に引きずり込まれている」とする (Habermas 1998: 233)。そこで、マルクーゼの哲学をその政治的活動からは切り離して再評価する道が探られる。「ホルクハイマーを中心とした小さなサークルの他のメンバーと比較して、たしかにマルクーゼは、根っから政治的な気質をもっている」としながらも、「マルクーゼは、ホルクハイマーやアドルノと比べても、狭義にアカデミックな人物である」とされる (Habermas 1998: 233-4)。そのうえで、とくに「生産性」と「破壊性」との絡まりあいを論じた点を評価しようとする。しかし、この点についても結局、次のようにその限界が指摘されることになる。「マルクーゼは、経済的成長の生産性とそれが社会にもたらす結果の破壊性との独特の絡まりあいを、物事に呪文をかけるような、またそれらを全体化するような概念で捉えた。それらの概念は、私たちには疎遠なものになっている」 (Habermas 1998: 238)。

文献

- Agger, Ben, 1976, “Marcuse & Habermas on New Science,” *Polity*, 9(2): 158-81.
- Feenberg, Andrew, 1996, “Marcuse or Habermas: Two Critiques of Technology,” *Inquiry*, 39(1): 45-70.
- Gandesha, Samir, 2004, “Marcuse, Habermas, and the Critique of Technology,” John Abromeit and W. Mark Cobb eds., *Herbert Marcuse: A Critical Reader*, New York and London: Routledge, 188-208.

- Habermas, Jürgen, 1956, “Triebchicksal als politisches Schicksal: Zum Abschluß der Vorlesungen über Sigmund Freud an den Universitäten Frankfurt und Heidelberg,” *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 14.07.1956, 10.
- , 1963a, “Zwischen Philosophie und Wissenschaft: Marxismus als Kritik,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Hermann Luchterhand, 162-214. (細谷貞雄訳, 1999, 「哲学と科学の間——批判としてのマルクス主義」(『理論と実践——社会哲学論集』未来社, 247-325.)
- , 1963b, “Kritische und konservative Aufgaben der Soziologie,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Hermann Luchterhand, 215-30. (細谷貞雄訳, 1999, 「社会学の批判的課題と保守的課題」(『理論と実践——社会哲学論集』未来社, 327-51.)
- , [1968]2022, *Technik und Wissenschaft als >Ideologie<*, Berlin: Suhrkamp. (長谷川宏訳, 1970, 『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊國屋書店.)
- , [1968]1987, “Einleitung zu einer Antifestschrift(1968),” *Philosophisch-politische Profile(Erweiterte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 253-9. (小牧治・村上隆夫訳, [1986]1999, 「反記念論文集への序文(1968年)」『哲学的・政治的プロフィール(下)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 9-18.)
- , [1973]1987, “Über Kunst und Revolution(1973),” *Philosophisch-politische Profile(Erweiterte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 259-65. (小牧治・村上隆夫訳, [1986]1999, 「芸術と革命について(1973年)」『哲学的・政治的プロフィール(下)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 18-25.)
- , [1978]1987, “Gespräch mit Herbert Marcuse(1977),” *Philosophisch-politische Profile(Erweiterte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 265-319. (小牧治・村上隆夫訳, [1986]1999, 「ヘルベルト・マルクーゼとの対話(1977年)」『哲学的・政治的プロフィール(下)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 26-105.)
- , [1978]2013, “Jürgen Habermas, Letter to Herbert Marcuse,” translated by Charles Reitz, *Radical Philosophy Review*, 16(1): 18-9.
- , [1980]1987a, “Psychischer Thermidor und die Wiedergeburt der Rebellischen Subjektivität(1980),” *Philosophisch-politische Profile(Erweiterte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 319-335. (小牧治・村上隆夫訳, [1986]1999, 「心理的テルミドールと反抗的主体性の再生(1980年)」『哲学的・政治的プロフィール(下)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 106-28.)
- , [1980]1987b, “Die Frankfurter Schule in New York(1980),” *Philosophisch-politische Profile(Erweiterte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 411-25. (小牧治・村上隆夫訳, [1986]1999, 「ニューヨークにおけるフランクフルト学派(1980年)」『哲学的・政治的プロフィール(下)——現代ヨーロッパの哲学者たち』未来社, 231-50.)
- , [1981]1999, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (河

- 上倫逸他訳, 1985-7, 『コミュニケーション的行為の理論』(上・中・下) 未来社.)
- , [1985]1988, *Der philosophische Diskurs der Moderne: Zwölf Vorlesungen*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (三島憲一・轡田収・木前利秋・大貫敦子訳, 1999, 『近代の哲学的ディスクルス』(I・II) 岩波書店.)
- , [1992]1994, *Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats(erweiterte Auflage)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (河上倫逸・耳野健二訳, 2002-3, 『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究』(上・下) 未来社.)
- , 1998, “Die verschiedenen Rhythmen von Philosophie und Politik: Herbert Marcuse zum 100. Geburtstag, ” *Die postnationale Konstellation: Politische Essays*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 232-9.
- , 2011, “Grossherzige Remigranten: Über jüdische Philosophen in der frühen Bundesrepublik. Eine persönliche Erinnerung,” *Neue Züricher Zeitung*, 02.07.2011, 61-2.
- 入谷秀一, 2023, 『感動を、演技する——フランクフルト学派の性愛論』 晃洋書房.
- Keulartz, Jozef, [1992]1995, *Die verkehrte Welt des Jürgen Habermas*, Hamburg: Junius.
- Kraushaar, Wolfgang Hg., 1998, *Frankfurter Schule und Stundenbewegung: Von der Flaschenpost zum Molotowcocktail 1946-1995*, Band 1: Chronik, Hamburg: Rogner & Bernhard.
- Marcuse, Herbert, [1956]1966, *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, Boston: Bacon Press. (南博訳, 1958, 『エロスの文明』 紀伊國屋書店.)
- , [1969]1998, “Brief an Theodor W. Adorno,” Wolfgang Kraushaar Hg., *Frankfurter Schule und Stundenbewegung: Von der Flaschenpost zum Molotowcocktail 1946-1995*, Band 2: Dokumente, Hamburg: Rogner & Bernhard, 601-2.
- Morris, Martin, 2001, *Rethinking the Communicative Turn: Adorno, Habermas and the Problem of Communicative Freedom*, New York: State University of New York.
- Müller-Doohm, Stefan, 2014, *Jürgen Habermas: Eine Biographie*, Berlin: Suhrkamp.
- Schnädelbach, Herbert, [1986]2002, “Transformation der Kritischen Theorie,” Axel Honneth and Hans Joas Hgg., *Kommunikatives Handeln: Beiträge zu Jürgen Habermas' »Theorie des kommunikativen Handelns«(Erweiterte und aktualisierte Ausgabe)*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 15-34.
- 辰巳伸知, 1992, 「ハーバーマスとマルクーゼ——批判理論の規範的基礎をめぐって」『年報人間科学』13: 71-82.
- Yos, Roman, 2019, *Der junge Habermas: Eine ideengeschichtliche Untersuchung seines frühen Denkens 1952-1962*, Berlin: Suhrkamp.